

J.LEAGUE NEWS

Vol. 139

30.Aug.2007



J.LEAGUE

編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想

Will Be
J.LEAGUE



劇的な逆転勝利を飾った J-WEST。獲得した各種の賞によって、表彰ステージ上はまさに大漁

©J.LEAGUE PHOTOS

J-WESTが劇的な逆転勝利を飾る

Jリーグの祭典「2007JOMOオールスターサッカー」

「2007JOMOオールスターサッカー」が8月4日、静岡県のエコパスタジアムで開催された。Jリーグの祭典ともいえるべき大会で、サポーター投票（応募総数245万3754票）とJリーグ推薦によって選ばれた選手たちが「J-WEST」「J-EAST」に分かれて対戦した。3万941人の入場者がスタンドで観戦した試合は、J-EASTが2点をリードしたが、J-WESTも反撃して試合終了直前の89分に逆転。3-2のスコアで終了し、J-WESTが2年ぶりの勝利を飾った。大会は前日の3日に行われた公開練習、前夜祭から熱気を帯び、当日はエコパスタジアムの周辺施設で開催されたJリーグサッカーパーク in SHIZUOKAに数多くの人々が来場。さまざまなアトラクションやイベントを思い思いに楽しみ、キックオフ前の時を過ごした。

オフィシャルスポンサー

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

KONAMI

AIDEM

HEIWA

GE Money

ネットワークパートナー

NTT 東日本 NTT 西日本

Jリーグ百年構想パートナー

朝日新聞

リーグカップスポンサー

ヤマザキナビスコ

エクイップメントサプライヤー

molten



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

J-WESTに勝利をもたらした、大久保のダイビングヘッドによる逆転ゴール。右下の写真は、鬼武チェアマンからMVP賞のクリスタルトロフィーを授けられた大久保

気温27.1度、湿度87%の中で行われた「2007JOMOオールスターサッカー」は、蒸し暑さを忘れさせる劇的な試合展開となり、スタンドの目はピッチにくぎ付けとなった。

快調なスタートを切ったのは、相手のオウンゴールとFW我那覇和樹の得点により、28分までに2点をリードしたJ-EAST。だが、「ホーム」となるJ-WESTも反撃。FW中山雅史が1点を返して前半を折り返すと、78分にFW

佐藤寿人が同点ゴール。さらに、タイムアップ直前の89分、「(ボールが)来そうだと思っていたら、本当に来た」というFW大久保嘉人がダイビングヘッドで決め、3-2と逆転に成功。ドラマチックなフィナーレを迎えた。

J-WESTの勝利は2年ぶり。J-WEST対J-EASTの方式における通算成績は、J-WESTの7勝1分5敗となった。

今大会のMVP賞は、千金の逆転ゴールを決

めただけでなく、他の2得点の起点ともなった大久保が初受賞。クリスタルトロフィー、賞金100万円のほか、静岡こしひかり1号、地中海産ホンマグロ1尾、クラウンメロン、ふくろい茶という副賞を手にし、「こういう賞を取ることができて、本当にうれしい」と喜びを語った。また、敢闘賞はJ-EASTの2得点に絡んだMF小野伸二、最も印象的なプレーを披露した選手に与えられるMIP賞には、J-WESTの攻



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS
敢闘賞の小野



© J.LEAGUE PHOTOS

2007年8月4日 17:03キックオフ エコパスタジアム

J-WEST 3 2 J-EAST

【得点経過】

19分 0-1 (E) オウンゴール
28分 0-2 (E)我那覇 和樹
38分 1-2 (W) 中山 雅史
78分 2-2 (W) 佐藤 寿人
89分 3-2 (W) 大久保 嘉人

【入場者数】3万941人

【主審】奥谷 彰男
【副審】唐木田 徹/青木 隆



© J.LEAGUE PHOTOS

スーパーエキジビションのFK対決。左上の写真は、トークでもスタンドを楽しませてくれた中山(左)と三浦

MIP賞の中山

JOMOオールスターサッカー杯を掲げる(株)ジャパンエナジーの松下功夫代表取締役社長(左)とJ-WESTのキャプテン、藤本

8/4

MVP賞はJ-WESTの大久保嘉人選手(神戸)が初受賞 歓声に包まれたJリーグサッカーパーク in SHIZUOKA



© J.LEAGUE PHOTOS

サッカークリニックには磐田、清水の選手が参加。Jリーガーとのプレーに子供たちも大喜び



© J.LEAGUE PHOTOS

キッズエリアのボールプール。「Mr.ピッチ」のシールを張ったボールを見つけた子供にはプレゼント



© J.LEAGUE PHOTOS

全国から集結したボランティアが大会を支えた

2007 JOMO オールスターサッカー出場選手

J-WEST

ヴァンフォーレ甲府/アルビレックス新潟/
清水エスパルス/ジュビロ磐田/
名古屋グランパスエイト/ガンバ大阪/
ヴィッセル神戸/サンフレッチェ広島/
大分トリニータ

監督 長谷川 健太 清水
コーチ 西野 朗 G 大阪

■サポーター投票選出選手

ポジション	選手名	所属	出場回数
GK	川口 能活	磐田	9回目
DF	青山 直晃	清水	2回目
	加地 亮	G 大阪	初出場
	市川 大祐	清水	5回目
MF	遠藤 保仁	G 大阪	2回目
	坂本 将貴	新潟	3回目
	家長 昭博	G 大阪	初出場
FW	矢野 貴章	新潟	初出場
	佐藤 寿人	広島	3回目
	中山 雅史	磐田	8回目

■Jリーグ推薦選手

ポジション	選手名	所属	出場回数
GK	北野 貴之	新潟	初出場
DF	増嶋 竜也	甲府	初出場
	三木 隆司	大分	初出場
MF	藤本 淳吾	名古屋	7回目
FW	大久保 嘉人	神戸	3回目

J-EAST

鹿島アントラーズ/浦和レッズ/
大宮アルディージャ/ジェフユナイテッド千葉/
柏レイソル/F C 東京/
川崎フロンターレ/横浜 F・マリノス/
横浜 F C

監督 関塚 隆 川崎 F
コーチ 高木 琢也 横浜 F C

■サポーター投票選出選手

ポジション	選手名	所属	出場回数
GK	川島 永嗣	川崎 F	初出場
DF	内田 篤人	鹿島	2回目
	中澤 佑二	横浜 FM	6回目
	水本 裕貴	千葉	初出場
MF	中村 憲剛	川崎 F	初出場
	水野 晃樹	千葉	初出場
	阿部 勇樹	浦和	5回目
	小野 伸二	浦和	3回目
FW	三浦 知良	横浜 F C	9回目
	巻 誠一郎	千葉	3回目
	我那覇 和樹	川崎 F	2回目

■Jリーグ推薦選手

ポジション	選手名	所属	出場回数
GK	菅野 孝憲	横浜 F C	初出場
DF	田中 マルクス	浦和	2回目
MF	福西 崇史	F 東京	3回目
	小林 大悟	大宮	2回目
FW	フランサ	柏	初出場

撃をリードした中山と、地元の静岡県出身の選手が選ばれた。

チームを勝利に導いたJ-WESTの長谷川健太監督は「ホームで勝つことができてうれしい」と責任を果たした安堵(あんど)感を口にし、「後半は気持ちを出し、得点しようと戦ってくれた」選手たちをたたえた。一方、敗れたJ-EASTの関塚隆監督は悔しさをにじませながらも、「選手たちが個々のいいところを出し、緊迫感の

ある試合になった」と熱戦を振り返った。

Jリーグを代表する実力と人気を兼ね備えた選手たちのプレーだけでなく、スタジアム周辺やキックオフ前のピッチで開催されるイベント、アトラクションを楽しむことができるのもJOMOオールスターサッカーの魅力。

エコパスタジアムの補助競技場など周辺施設を会場に行われた「Jリーグサッカーパーク in SHIZUOKA」には8,266人が来場。地元の

ジュビロ磐田、清水エスパルスの選手も参加したサッカークリニックやハッピーファミリーサッカーは、暑さもちとわらない子供たちの元気な歓声に包まれた。

また、エコパスタジアムのピッチ上で行われたスーパーエキジビションは、J-WEST、J-EASTの選手によるFK対決。中山、J-EASTのFW三浦知良など、キックオフを待つスタンドを楽しませた。

8/3 公開練習&前夜祭



© J.LEAGUE PHOTOS

エコパスタジアムでの公開練習を見守るファン・サポーター

2007 JOMO オールスターサッカーの試合前日には、エコパスタジアムで両チームの選手による公開練習が、浜松市内のホテルでは前夜祭が行われた。公開練習には1,727人のファン・サポーターが訪れ、リラックスした中にも翌日の試合に備えて真剣にトレーニングする選手たちの姿を目で追っていた。

JOMO オールスターサッカーが静岡県内で開かれるのは初めてのこと。前夜祭にはスポンサーの



© J.LEAGUE PHOTOS

前夜祭は両チームの選手、監督、コーチの登場で盛り上がった

株式会社ジャパンエナジーの松下功夫代表取締役社長、Jリーグからは鬼武健二チェアマン、大勢のチーム関係者をはじめ、地元静岡県の石川嘉延知事らが出席、J-WEST、J-EAST両チームの監督、コーチ、選手を激励した。

J-WESTで今回最多の35万8659票の得票だったキャプテンの藤本淳吾が「素晴らしい選手がそろったので、ぜひいい試合を見せたい」と言えば、J-EASTのキャプテンを務める三浦知良も「この



© J.LEAGUE PHOTOS

衰えぬ闘志を燃やした中山(左)と三浦

ところEASTが勝っているの、今度も頑張る」と闘志満々。J-WESTの指揮を執る長谷川健太監督、J-EASTの関塚隆監督もそれぞれ意欲をみなぎらせた。

39歳10カ月で出場、注目のJ-WEST中山雅史が「(三浦)カズさんには負けられない」と言えば、40歳5カ月で9回目の出場となる三浦も「フルタイム出場したい」と衰えぬ闘志をのぞかせ、集まった人々を沸かせていた。

育成

夏休みに楽しい、貴重な経験を積んだ子供たち

国内外で育成への活発な取り組み

2007 A3 U-14フレンドリー フットボールツアー

U-14世代のリーグ戦と国際交流



リーグ戦、しかも国際試合という貴重な体験 (新潟対釜山より)



キャンプファイアーで盛り上がる



チームの垣根を越えたグループごとの野外炊飯



ユニフォームの色は異なっても、すぐに打ち解ける

「2007 A3 U-14 フレンドリー フットボールツアー」はA3チャンピオンズカップ2007の一環として中国、韓国、日本の3カ国の育成年代の交流を目的に開催された。U-17は中国、U-12は韓国で実施され、日本では7月28～30日、新潟聖籠スポーツセンター アルビレッジでU-14のイベントが行われた。参加したのは日本のJクラブ下部組織8チーム

のほか、中国の山東魯能、韓国の釜山アイパークユースクラブの合計10チーム。5チームずつ2グループに分かれたリーグ戦形式の試合を実施したほか、ゲーム的な要素を加えた野外炊飯や食事、選手交流会を通じて子供たちはすっかり打ち解け、相互の友好を深めた。また、指導者交流会も行われ、育成に関する意見交換も行われた。

2007 A3 U-12 フレンドリー フットボールツアー

韓国で開催。日本からはサガン鳥栖U-12が参加



試合を重ねるごとに、相手のスピードや当たりの強さに適応 (釜山対鳥栖より)



鳥栖の選手たちには有意義な体験となり、夏休みのいい思い出にもなった

上記のU-14と同じくA3チャンピオンズカップ2007に付帯したイベントとして、8月16～20日に「2007 A3 U-12 フレンドリー フットボールツアー」が韓国南部の南海スポーツパークで開催された。韓国Kリーグクラブの下部組織の12チームのほか、中

国から山東魯能、日本からはサガン鳥栖U-12の合計14チームが参加した。

試合のほかにも、ビーチでのチーム対抗相撲大会など、さまざまな交流を経験。ほかのチームの選手たちとも積極的にあいさつを交わしたり、英語を使って会話を行う

など、田中智宗監督も「プレーだけでなく、生活面でも変わってきている」と、短期間での子供たちの成長を認めた。

鳥栖は選手19名のうち約半数が初めての海外体験ということもあり、非常に有意義な遠征となったようだ。

2007 Jリーグ U-12 フェスティバル

ASEや自然体験のプログラムも実施

「2007 Jリーグ U-12 フェスティバル」が7月30日～8月24日に宮城県、群馬県、長野県、静岡県、愛媛県の5会場に分かれ、合計61チームが参加して開催された。Jリーグに加盟する31クラブの12歳以下の選手を対象とするイベントで、各会場には地元のクラブも参加した。「補欠」のない8人制の「ゲーム」だけでなく、ASE(社会性育成のための実際体験)プログラムや自然体験などの活動も行い、豊かな人間性をはぐくむことを目的とする。会場ごとにプログラムは異なるが、ゲームのほか、野菜狩りや自然体験、バーベキューやキャンプファイアー、Jリーガーとの交流など、充実したプログラムを楽しんだ。また、長野県と静岡県の会場には岡田正義氏らのスペシャルレフェリー(SR)も参加し、審判との交流も行われた。



「補欠」がなく、選手交代も原則的に何人でも可能な8人制による「ゲーム」(長野県)



仲間同士で力を合わせて(長野県)



気持ちのいい清流での自然体験活動(宮城県)



チームメートとの食卓は話も食欲も進む(宮城県)

U-15 Jリーグ選抜

ブラジル／ドイツ 海外キャンプに派遣



ドイツキャンプの初戦、レバークーゼンとの試合に臨む

Jリーグは8月20～30日、ブラジルのリオデジャネイロで開催された第10回日伯友好カップ、およびドイツにU-15 Jリーグ選抜チームをそれぞれ派遣し、海外キャンプを実施した。

日伯友好カップはブラジルのU-15年代のトップクラスのチームが参加する高レベルの大会で、2003年、04年はU-15日本代表、05年からはU-15 Jリーグ選抜が参加してい

る。またドイツは、ブンデスリーガ(ドイツリーグ)の協力により、初の海外キャンプ実施となった。

また、審判員養成の一環として、国際経験と育成年代におけるレフェリング経験の機会を提供する目的で、日本サッカー協会(JFA)の協力により、JFA 1級審判員が1名ずつ帯同し、現地の試合でジャッジを行った。

育成 「選手一貫教育 指導者研修会」を開催

「選手の考え判断していく力」を引き出すために

U-15からU-18年代を担当している監督、コーチを対象とした「選手一貫教育 指導者研修会」が鹿島ハイツスポーツプラザ(茨城県鹿嶋市、6月27～28日)、トヨタスポーツセンター(愛知県豊田市、7月11～12日)、宗像グローバルアリーナ(福岡県宗像市、7月18～19日)の3会場で行われた。

テーマとなったのは、プロ登録を目前に控えた選手たちの「自らが考え判断していく

力」を指導者が引き出すための考え方や具体的な方法。それぞれ2日間のコースで、選手のやる気を引き出したり目標を持たせるためのモチベーションマネジメント、ASEや栄養指導を通じたコミュニケーションについての講義のほか、スポーツライフスキルについての講義とワークショップ、「選手が力を引き出されるとき」と題した講演なども行われた。



ワークショップで意見交換を行うU-15～18年代の指導者

2007 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

大会 横浜F M vs 川崎F、G大阪 vs 鹿島。決勝に進むのは？

大会史上初の一般公開ドローイングで準決勝の組み合わせが決定

Jリーグは8月20日、「2007 Jリーグヤマザキナビスコカップ 準決勝組み合わせドローイング」を「ありがとう！お台場10周年ザ・冒険王2007」会場内のフットサル場で開催した。組み合わせドローイングを一般公開するのは、本大会史上初めてのこと。

準決勝進出の4チームからは、柳沢敦（鹿島アントラーズ）、寺田周平（川崎フロンターレ）、

坂田大輔（横浜F・マリノス）、實好礼忠（ガンバ大阪）が参加。横浜F M対川崎F、G大阪対鹿島と決まった組み合わせに、新たな闘志を燃やしていた。

また、鬼武健二チェアマンは「長い時間をかけて勝ち抜いてきた強豪4クラブが、まず準決勝でどんな試合をするのか、楽しんでいただきたい」と述べた。



強い日差しが照りつける中、多くの人々が見守った

【決勝トーナメント準決勝 組み合わせ】

【決勝】11月3日（土・祝）/国立

【準決勝】

第1戦 10月10日（水）19:00/日産ス
第2戦 10月13日（土）15:00/等々力

【準決勝】

第1戦 10月10日（水）19:00/万博
第2戦 10月13日（土）15:00/カシマ

川崎F

横浜FM

鹿島

G大阪

※表の右側のチームが第1戦のホームチーム、左側のチームが第2戦のホームチームとなる



健闘を誓い合う、左から寺田（川崎F）、坂田（横浜FM）、柳沢（鹿島）、實好（G大阪）

芝生 第2回「わたしたちの芝生校庭自慢! 大募集!」キャンペーン

Jリーグ百年構想 芝生の学校応援企画



© J.LEAGUE PHOTOS

昨年7月3日に川崎市立土橋小学校で行われたJリーグ百年構想サッカー教室

Jリーグは「Jリーグ百年構想」の活動の一環として、全国に芝生の校庭やグラウンドを広げようという活動を応援しており、その応援企画として第2回「わたしたちの芝生校庭自慢! 大募集!」のキャンペーンを実施している。

本企画は2005年の実施に続くもので、募集は全国の幼稚園から高校までを対象とし、9月30日まで芝生の校庭・園庭自慢を募っている。応募された芝生校庭自慢は、Jリーグ公式ホームページ内で公開するとともに、校庭・園庭の芝生化を応援するMr.ピッチ（ミニサイズ）をプレゼントする。さらに、応募校の中から数校には、Jリーグ百年構想メッセンジャーのMr.ピッチや城彰二氏が訪問したり、地元Jクラブの選手・コーチなどによる芝生校庭でのサッカー教室を実施する。

なお、応募方法の詳細などについては、Jリーグ公式ホームページ（<http://www.j-league.or.jp/>）内の第2回「わたしたちの芝生校庭自慢! 大募集!」のコーナーを参照。

社会貢献 新潟県中越沖地震で被災した新潟県に義援金を寄付

Jリーグ選手協会も義援金募金活動を実施

Jリーグは、7月16日に発生した新潟県中越沖地震によって被災した新潟県に対し、義援金として500万円を寄付した。

また、8月4日にエコパスタジアムで開催された2007JOMOオールスターサッカーに際しては、Jリーグ選手協会の「新潟県中越沖地震に対する義援金募金活動」に協力。エコパスタジアム内のコンコース、Jリーグサッカーパーク in SHIZUOKAの会場で行われた募金活動には44万2176円の義援金が

寄せられ、新潟県中越沖地震対策本部を通じ、被災者へ送られた。

エコパスタジアムやJリーグサッカーパーク in SHIZUOKAの会場では、イベントに参加した清水エスパルス、ジュビロ磐田の選手、また試合に出場したJリーグ選手協会会長の藤田俊哉（名古屋グランパスエイト）、同副会長の川島永嗣（川崎フロンターレ）、北野貴之（アルビレックス新潟）の各選手が募金への協力を呼びかけた。



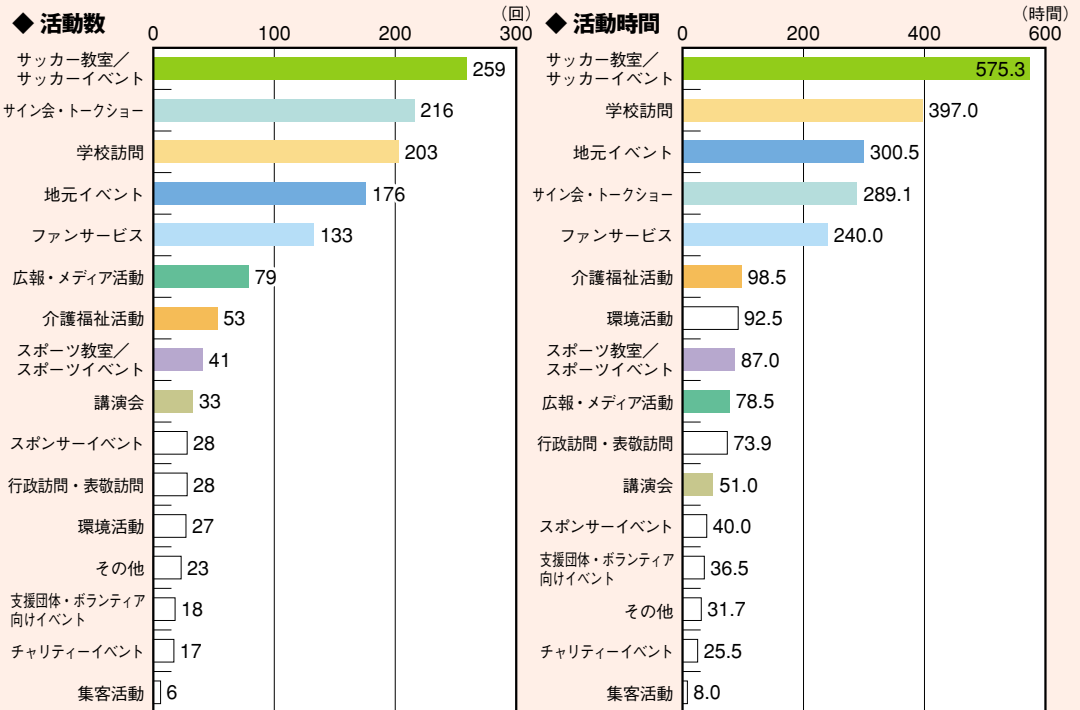
2007JOMOオールスターサッカーの会場で行われた募金活動

「2006 Jリーグ選手等ホームタウン活動調査」

選手、クラブの参加状況などを詳細に把握

Jリーグは2006シーズンの選手などによるホームタウン活動について、活動内容、開催回数、各選手活動時間など12項目のアンケート調査を実施し、結果を公表した。選手のホームタウン活動への参加状況を、右表のような活動ジャンルや選手ごとの参加時間まで詳細に把握するなど、クラブ間で情報を共有し、今後の充実した活動に結びつけようとするもの。調査の一例では、活動の全体傾向として数、時間とも「サッカー教室／イベント」、対象者では「小学生」が最も多いなどの結果が表れている。また、Jリーグ登録選手のほぼ全員に当たる980人が地域活動に参加している実態が分かった。選手の参加傾向としては、年間平均が6.2回、12.2時間で、1人当たりの数、時間ではヴァンフォーレ甲府がトップという結果も出た。この調査は2007シーズンも実施される予定。

活動ジャンル



JCYインター・シティー・カップ(U-15) in HIDA、西日本インターシティーカップサッカーフェスティバル(U-15)を後援

Jリーグは、昨年に引き続き、日本クラブユースサッカー連盟が主催する第4回JCYインター・シティー・カップおよび第3回西日本インターシティーカップサッカーフェスティバルを後援した。同大会は、日本クラブユースサッカー選手権大会に出場できなかったチームがモチベーション高く参加できる競技会として位置づけ、日本の将来を担うユース年代の少年たちのサッカー技術の向上、クラブチームの普及と発展を目的とし、開催するもの。8月6～12日の期間で、岐阜県飛騨市で16チーム、長崎県佐世保市で20チームが参加して行われた。

第1回FIPFAワールドカップ2007を後援

Jリーグは、パワーチェアーフットボール（電動車いすサッカー）の世界大会、「第1回FIPFAワールドカップ2007」を後援する。同大会は、日本および世界において電動車いすサッカーの普及振興を図るとともに日本代表選手および各国代表選手の育成と国境を越えた選手間の交流を目的とするもので、10月8～13日の期間、東京都江東区で日本を含む6チームが参加して開催される。

技術委員選任

Jリーグは、Jリーグ技術委員会委員に横浜 F・マリノス フィジカルコーチの池田 誠剛（いけだ せいごう）氏を選任した。なおJリーグ技術委員会委員長および委員は以下の通り。

* 敬称略

	氏名	所属
委員長	山下 則之	Jリーグ
委員	中村 勝則	横浜 F・マリノス 取締役
	池田 誠剛	横浜 F・マリノス フィジカルコーチ
	反町 康治	U-22日本代表監督
	瀧井 敏郎	東京学芸大学 教授
	上野山 信行	ガンバ大阪 普及・育成部長
	眞藤 邦彦	日本サッカー協会
	小幡 真一郎	日本サッカー協会 審判部
	大住 良之	サッカー・ジャーナリスト(フリー)
	武智 幸徳	日本経済新聞 運動部長
	祖母井 秀隆	グルノーブル GM

2007 カルビーサンフレッチェカップを後援

Jリーグは、7月に広島で開催された「2007カルビーサンフレッチェカップ(U-15およびU-12)」を後援した。同大会は、U-15およびU-12年代の理想的な試合形式を用いたゲーム環境で、個を伸ばしていくこと、および指導者の交流、情報共有を図り豊かな人間性の育成を目的とするもので、U-15は16チームが参加し、50分制交代自由のゲームを、U-12は20チームが参加して、36分の8人制サッカーが行われた。

ファジアーノ岡山が準加盟クラブに

Jリーグは、8月21日の理事会で、ファジアーノ岡山のJリーグ準加盟申請について審議した結果、同クラブのJリーグ準加盟を承認した。ファジアーノ岡山は、ロッソ熊本、栃木 S C、ガイナレ鳥取、F C 岐阜に続く5番目の準加盟クラブとなり、地域リーグ加盟クラブとしては初の準加盟認定となった。

ファジアーノ岡山	
法人名	株式会社ファジアーノ岡山スポーツクラブ 代表取締役 木村 正明 設立：2006年7月13日
所在地	岡山市厚生町3-1-15 岡山商工会議所ビル6F
所属リーグ	中国リーグ(3シーズン目)
ホームタウン(予定)	岡山市、倉敷市、津山市を中心とする岡山県全県
ホームスタジアム	岡山県総合グラウンド陸上競技場(愛称「桃太郎スタジアム」)

Jリーグの15年を振り返る ― 第5回

「データ」記録と登録

15年目を迎えたJリーグを、さまざまなテーマから振り返る5回目は、試合の記録や選手の登録といった「データ」を取り上げる。リーグとして正確な記録を残そうという考えは、サッカーの本場である欧州にも先ずるもの。技術の進歩やメディアのニーズなどとともに、記録や関連情報の作成・配信の方法も変化し、ビジネス展開への発展も期待される。また、選手などの登録は、Jリーグの試合を公平に運営するための根幹ともいえる業務であり、その重要性は一貫して変わらない。

©J.LEAGUE PHOTOS

Jリーグデータセンター内の様子。各試合会場、各クラブから集まるデータを処理・管理し、記録や登録をつかさどる中枢となっている

正確な記録作成への努力

新聞やサッカー専門誌などに掲載されている、試合の得点や出場メンバーの一覧、あるいはテレビのサッカー中継で画面上に現れる他会場の途中経過や、前半あるいは前後半を合わせたシュート数やコーナーキック数の集計など。普段は何げなく目にするこうした「記録」や「データ」の作成、管理も、Jリーグが発足して以来、重要視してきた活動の一つだ。

Jリーグの前身ともいえる日本サッカーリーグ(JSL)がその歴史を閉じ、「日本サッカーリーグ全史」を編さんするに際し、古い記録の収集に苦労したという話もある。「Jリーグはプロフェッショナルである以上、正確な記録を残そう。こうした強い姿勢が出発点となった」と振り返るのは、当初から1998年まで活動に携わった藤村昇司Jリーグリーグマネジメントグループマネージャーである。

当時、欧州などでもリーグやクラブが試合の記録を作成する例はほとんどなく、メディアの仕事と考えられていた。「リーグとして記録を残そうというのは、世界的に見ても新しい発想といえるかもしれない」(藤村マネージャー)。

リーグとして記録を残したいという姿勢に加え、試合会場におけるサービス、メディアへの配信、そしてデータビジネス化も視野に入れ、関係者の活動は始まった。

93年にJリーグがスタートした当時の記録作成と配信は、現在のような完全なオンラインシステムではなかった。当時は関係者が「J端末」と呼んだペンタタッチのパソコンで記録員が作成し、試合会場ではプリントアウトされたものが配布された。一方、メディア各社へは、記録データを入れたフロッピーディスクを会場の通信端末に移し変えてJリーグデータセンターに送信し、ファクスによって配信した。

また、万が一のトラブルも想定し、手書きの記録作成も会場の記録員にお願いした。機器が不具合になることにも備え、予備として同じものをもう一つ、会場に運ぶ念の入れようだった。それも「公式記録を残せない、メディアが必要とするタイミングで配信できないのは許されないという、強い意識があった」(藤村マネージャー)からである。

正確な記録を残したいという意識は、試合会場で作成を担当する記録員にも強かった。プレーごとに声を出して録音したり、テレビやビデオを記録室に持ち込んで正確を期したり、ピッチレベルに配置した記録員と記録室が連絡を取り合うなど、さまざまな努力、工夫が行われた。

Jリーグが記録員の研修会を毎年開き、機器操作の指導や、シュート、得点経過、OWNゴールの解釈統一も試みられた。OWNゴールの場面ばかりを集めたビデオなども作成し、

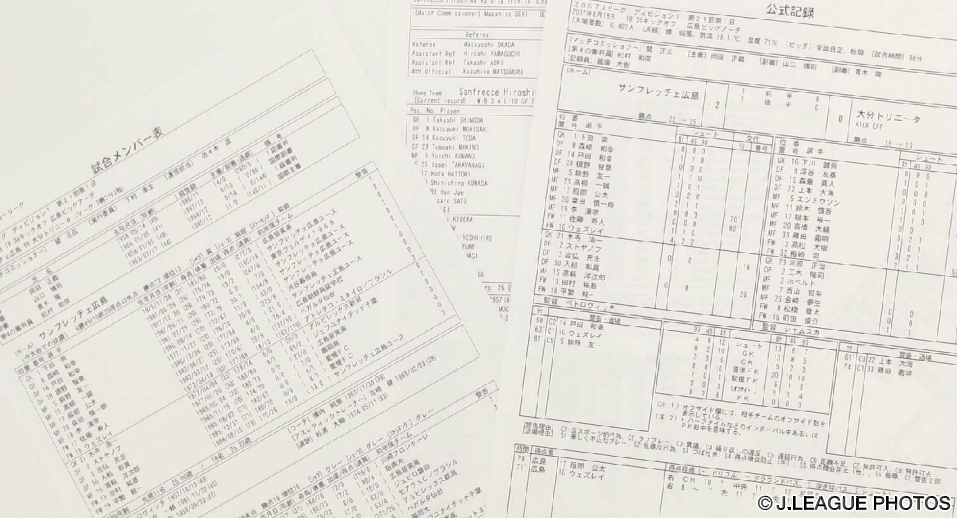
教材として利用された。

ニーズの多様化・複雑化

Jリーグが始まって今年が15年目のシーズンだが、その間、パソコンや携帯電話の普及などをはじめ、社会の様相は著しく変化した。こうした技術の進歩や多様化するニーズが、試合などの記録データ作成・管理などに影響を与えたことは疑いない。かつてはフロッピーディスクを介さねばならなかった試合記録も、現在は試合会場で記録員がシュート、フリーキック、警告といったイベントを確認するとに逐一、Jリーグデータセンターに送信されてくる仕組みが確立している。

Jリーグのクラブ数増加に伴う試合数の増加によって、Jリーグデータセンターが扱うデータも当初とは比較にならないほど増えている。新たなホームタウンを持つクラブが加われば、地元メディアの関心も高まる。メディアも紙面編集などそれぞれの事情に応じて、データを必要とするタイミングが異なる。99年にはJリーグが2部制となり、2002年にはサッカーくじの「toto」もスタートしたことにより、記録の重要性がクローズアップされた。現在はJリーグ公式ホームページ上において、誰もが試合記録などを閲覧することが可能となっている。

量ばかりでなく、メディアのニーズも多様化、



Jリーグの試合会場でメディア向けに配布される「試合メンバー表」と「公式記録」。正確な選手登録が基本だ



©J.LEAGUE PHOTOS

クラブ数の増加に伴い、試合数も増える。公式記録だけでも膨大な量だ

記録がJリーグを楽しくする



©J.LEAGUE PHOTOS

記録を活用してJリーグを盛り上げた例としては、2005年に行われた「10,000ゴールキャンペーン『10,000ゴール、決めるのは誰だ!?～ゴールを決める選手を当てろ!!～』」がある。J1リーグ戦における通算得点が10,000ゴールに迫ったこの年、Jリーグは記念すべき得点を決める選手を予想するオープン懸賞キャンペーンを実施。1等(1名)に500万円相当のオーダーメード旅行のほか、総額1000万円相当の商品が提供された。なお、メモリアルゴールは5月8日の第11節、万博記念競技場におけるガンバ大阪対名古屋グランパスエイト戦で生まれ、当時22歳の新人MF、前田雅文がJリーグ史に名を残した(写真上)。

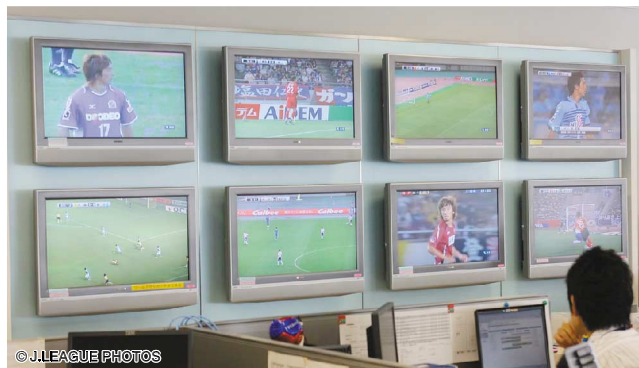


©J.LEAGUE PHOTOS

緑の表紙が「J.LEAGUE OFFICIAL FANS' GUIDE」、赤い表紙が「J.LEAGUE YEARBOOK」。毎年発行され、ともに選手、チームなどのデータが満載された貴重な資料だ

複雑化してきた。連続試合出場記録・同得点記録、最年長・最年少の出場・得点記録、ハットトリック、GK防御率…。連続記録の場合、J1とJ2にまたがっている数字をどのように扱うか。チーム名称の変更、ネーミングライツによるスタジアム名称の変更にも気を配らなければならない。メディアの問い合わせに対し、正確に、迅速に答えることのできる態勢を整える一方、達成されそうな記録に注目し、発信する努力も怠らない。

Jリーグの試合が行われている間は、試合会場から送られてくる情報に集中するのはもちろん、試合の様態を伝える8台のモニター画面に注意しつつ、記録達成の可能性にも気を配る。まさに試合が行われている最中は「時間との戦い」(Jリーグデータセンター 田原和美)となる。



©J.LEAGUE PHOTOS

Jリーグの試合がすべて生放送されるようになったのは、記録の確認にもプラス

田原は「データは蓄積されるが、そのままではいけないという感覚を持たないと。もっと活用があると思うし、活用してほしい」と語る。そのデータビジネスについても、これまでにさまざまな試みがなされてきた。今後は「情報を発信しながら、受け手側で加工できる情報や、文字だけでなく映像、写真と連動したデータの有効活用が今後のステップ」(窪田慎二Jリーグ リーグプロデュースグループ アシスタントマネージャー)と新たな発展が期待される。

試合運営の根幹となる選手登録

Jリーグのデータで試合記録とともに重要なのが、選手などの登録である。その重要性について窪田アシスタントマネージャーは、「例えば、未登録などで試合に出場できない選手が出場して勝ったら、大変なことになる。選手の登録は、試合を公平に開催し、成立させる根幹ともいえる。正確であることが当然で、ミスは絶対に許されない。これは1993年にJリーグがスタートして以来、全く変わっていない。Jリーグの競技面を支える最も大切な仕事の一つ

という意識を持って、業務に当たっている」と述べる。

この選手登録に関しては、Jリーグがスタートして以来、クラブが申請し、Jリーグが承認するというスタイルは変わっていない。変わった点といえば、試合記録のやり取り同様、99年を境にオンライン化されたことだ。それ以前は紙ベースでクラブが提出し、Jリーグデータセンターで入力するという方式で行われていた。現在は、専門のネットワーク上で登録申請、承認されるようになり、簡略化されている。

Jリーグデータセンターは、このシステムのサポート、データの更新などを行い、登録されているデータを基に、試合の記録などを作成している。もちろん、選手登録に関するデータは個人情報に当たり、公表されている項目以外は厳重に管理されている。

また、Jリーグは英国のOptaIndex社が開発したOptaデータを公認し、「J-STATS Opta」としてライセンス事業形態によるデータ事業を展開している。

「J-STATS Opta」は、コンピューターソフトウェアを使って試合中の選手のインプレー中のプレーをデータベース化し、集計・編集することによって作成される。データベースの項目は約300に及ぶ。現在は、テレビ、新聞、サッカー専門誌、ゲームソフトなどでOptaデータが幅広く使用されている。

Report

リポート

©J.LEAGUE PHOTOS

欧州におけるセキュリティ状況の視察調査 日本にどう生かすか

新装なったロンドンのウェンブリースタジアムでセキュリティ担当者の話を聞く調査団メンバー

独自性と共通性

今回の欧州視察調査は「スタジアムに来場するすべての人々に安全で快適な観戦環境を提供するため、何が求められるか」「小さい事柄でも改善すべきこと、難しいが大きく改革しなければいけないことを考える」「実施すべきことへの指針を得る」ことなどを目的に行われた。Ｊリーグは1996年に初めてこうした視察調査を実施したが、それ以来となる今回は「安全の確保と施設は表裏一体という観点から、日本サッカー協会施設委員会のメンバーも同行」（日本サッ

カー協会（ＪＦＡ）事業部国際試合運営グループ部長 加賀山公）した。

調査日程、メンバーは別掲のとおりだが、主に安全、快適性の指針、セキュリティプラン（警備組織体制）、およびスタジアム施設について欧州サッカー連盟（ＵＥＦＡ）の考え方やドイツ、フランス、およびイングランドの状況を調査。現地担当者との質疑応答、施設・設備見学などを通じ、各国、各クラブの実態に即した現実的、かつ柔軟な対応を見聞した。

例えばアルコールについて、ドイツではビールは水と同じという考えから、販売も観客席への持ち込みも可、フランスはスタジアム内では販売禁止、イングランドはスタジアム内での販売は可、ただし観客席への持ち込みは不可など、さまざまな考え方があった。

ただし、「ホームとアウェイのサポーターを分離する際の考え方以外は、基本的にどこも同じ」（Ｊリーグリーグプロデュースグループ 渡部輝道）だった。これはＵＥＦＡが各国ＦＡ（サッカー協会）のセキュリティ担当者を集めて研修会を開くなど、欧州全体の共通テーマとして解決していこうとい

う姿勢の表れでもあるのだろう。

充実ぶりの背景

訪問した各所では、国または自治体の法律、ＦＡやリーグの規程を抑止力、最先端の設備、さまざまな工夫を駆使し、大会・試合のリスクに応じて対策を講じている。その充実ぶりを促したのが、80年代に英国やベルギーで起きた競技場内におけるファン・サポーターの死傷事件だ。欧州サッカー界に衝撃を与えた事件だけに「問題が起きたときの対応は分かりやすいが、重要なのは未然に防止すること。欧州ではそのための努力、工夫に重点が置かれ」（加賀山）、「安全確保が最優先。そのため、セキュリティ担当者や競技場管理者は、大きな権限を持って任務に当たっていた」（渡部）。

もちろん、そうした過去を持つ欧州と日本の実情は異なるだけに、現地で収集した情報をそのまま適用できるとは限らない。だが、「この経験を日本における既存の状況に、どのように当てはめるか」（渡部）、「日本らしい生かし方があるはず。関係者やサポーターと協力し、選手も含めて、それを模索していきたい」（ジェフユナイテッド千葉 大木誠）など、調査団のメンバーに大きな刺激を与えた。

今後は、この調査結果が安全対策における啓蒙（けいもう）活動などに有効活用され、「ＪＦＡと連携しつつ、Ｊリーグ、31のＪクラブの共同作業として、安全基準の作成や見直しなどに役立てたい」（渡部）。「セキュリティという言葉は、違反行為を取り締まるというイメージもあるが、そういう事態を起こす人はごく一部。基本は、多くの人々に安全で快適な観戦環境を提供すること」（加賀山）だ。

一方、「欧州でもファミリー席が増えている。それは日本を見習ったようだ」（渡部）と、日本の競技場の観戦環境も注目されている。「入場券のカテゴリーによって動ける範囲が限定されている欧州では、日本のようにコンコースを自由に歩いて食べ歩きをすることもできない、という見方もできる」（大木）。こうした状況が今後も変わることがないよう、関係者の熱心な努力は続く。

調査日程

- 7月16日 ＵＥＦＡ（スイス・ニヨン）
- 7月17日 ブンデスリーガ（ドイツ・フランクフルト）
1.FSVマインツ05（ドイツ・マインツ）
[ドイツ組]
FCケルン（ドイツ・ケルン）
ボルシア・ドルトムント（ドイツ・ドルトムント）
シャルケ04（ドイツ・ゲルゼンキルヘン）
[フランス組]
フランスプロサッカーリーグ（フランス・パリ/サント）
フランススタジアム
- 7月19日 イングランドＦＡ（英国・ロンドン）
ウェンブリースタジアム
- 7月20日 プレミアリーグ（英国・ロンドン）
トットナム・ホットスパー
アーセナルＦＣ

調査団メンバー

- 団 長 佐々木一樹（Ｊリーグ常務理事）
- メンバー 加賀山 公（日本サッカー協会事業部）
奥田 泰久（日本サッカー協会事業部）
吉村 正弘（日本サッカー協会事業部）
渡部 輝道（Ｊリーグリーグプロデュースグループ）
大木 誠（ジェフユナイテッド千葉）
暁 良基（横浜Ｆ・マリノス）
辻 禎之（三菱総合研究所）



入場ゲート（ケルン）



アウェイサポーターのエリア（ケルン）



コントロールルーム（トットナム）

写真提供：© J.LEAGUE PHOTOS



「Ｊリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。